銀行勘定の金利リスク（IRRBB）における金利ショックの改定
－バーゼル委員会による定期的なレビュー－

小立　敬

▌要　約▐

1. バーゼル委員会は 2024 年 7 月 16 日、銀行勘定の金利リスク（IRRBB）の計測において金利ショック・シナリオを生成する際に、インプットとして必要な各通貨に係る金利ショックを改定する最終文書を公表した。本件については、バーゼル委員会が 2023 年 12 月に市中協議文書を公表しており、今般の最終文書は市中協議プロセスを経て最終化されたものである。
2. 市中協議文書は、時系列データを2022年末まで拡張して金利ショックの水準を再調整することに加えて、金利ショックを決定する際の計測手法を見直すことを提案していた。今般の最終文書では、市中協議文書が提案した計測手法の改定についてはそのまま採用されているが、①時系列データを2023年末まで延長し、②金利ショックの数値を 50 ベーシスポイント（bp）から 25bp の単位で丸めるよう変更したことから、金利ショックの大きさは市中協議文書が提案したものとは一部異なるものとなっている。
3. 米ドルやユーロ、英ポンド、スイスフランを含む一部の通貨では金利ショックの水準が引き上げられることから、計測される一部通貨のIRRBBの水準に影響が生じることが考えられるが、円金利については現行の水準から変更はなく、日本の金融機関が計測するIRRBBの通貨合計値には大きな影響は生じないものとみられる。
4. なお、2023 年 3 月の銀行危機の背景の 1 つに、金利リスク管理の失敗が指摘されており、バーゼル委員会が現行のIRRBBの枠組みに関して見直しを行うのかどうかについても今後注視していく必要があるだろう。

野村資本市場研究所　関連論文等

・小立敬「銀行勘定の金利リスク（IRRBB）に関するバーゼル委員会の提案―金利ショックに関連する見直し―」『野村資本市場クォータリー』2024年冬号。
・小立敬「第2の柱で決着したバーゼル委員会による銀行勘定の金利リスク（IRRBB）の取扱い」『野村資本市場クォータリー』2016年夏号（ウェブサイト版）。

Ⅰ 金利ショックの改定を図る最終文書の公表

バーゼル銀行監督委員会（BCBS、以下、バーゼル委員会）は 2024 年 7 月 16 日、銀行勘定の金利リスク（IRRBB）[1]の計測において金利ショック・シナリオを生成する際に、インプットとして必要な各通貨の金利ショックの改定を図る最終文書を公表した[2]。本件に関しては、バーゼル委員会が 2023 年 12 月に市中協議文書を公表しており[3]、今般公表された最終文書は、市中協議プロセスを経て最終化されたものである。

IRRBB はバーゼルⅢの下、バーゼル委員会が 2016 年 4 月に基準を最終化した枠組みである[4]（以下、IRRBB 基準）。IRRBB 基準が規定する金利ショック・シナリオとしては、①上方パラレルシフト、②下方パラレルシフト、③スティープ化、④フラット化、⑤短期金利上昇、⑥短期金利低下という 6 本が用意されている。これらのシナリオ生成に必要な各通貨の金利ショックの大きさは、2000 年から 2015 年までの実際の金利の時系列データを基に IRRBB 基準において設定されている（図表 1）。

金利ショックの大きさについて IRRBB 基準は、定期的（例えば、5 年毎）にレビューする考えを示している。これを受けて、バーゼル委員会の 2023～2024 年の作業プログラムでは、金利ショック・シナリオをレビューする方針が明らかにされていた[5]。2023 年 12 月の市中協議文書はこうした文脈において策定されたものである。

図表 1　現行の金利ショック（単位：bp）

	アルゼンチン・ペソ	オーストラリア・ドル	ブラジル・レアル	カナダ・ドル	スイス・フラン	中国人民元	ユーロ	英ポンド	香港ドル	インド・ルピー	インドネシア・ルピア
パラレル	400	300	400	200	100	250	200	250	200	400	400
短期	500	450	500	300	150	300	250	300	250	500	500
長期	300	200	300	150	100	150	100	150	100	350	300

	日本円	韓国ウォン	メキシコ・ペソ	ロシア・ルーブル	サウジ・リヤル	スウェーデン・クローナ	シンガポール・ドル	トルコ・リラ	米ドル	南アフリカ・ランド
パラレル	100	300	400	400	200	200	150	400	200	400
短期	100	400	500	500	300	300	200	500	300	500
長期	100	200	300	300	150	150	100	300	150	300

（出所）IRRBB 基準より野村資本市場研究所作成

1 IRRBB とは、金利水準の変動により銀行勘定の資産・負債の市場価格あるいは収益が変動することによって生じるリスクである。IRRBB の具体的な計測の枠組みとしては、バーゼル委員会が規定する金利ショック・シナリオの下、バランスシート（エクイティ）の経済価値の減少額（ΔEVE）と純金利収入の減少額（ΔNII）の計測を銀行に求めている。IRRBB は、第 1 の柱（Pillar1）としてリスク・アセットの計測に含まれるのではなく、第 2 の柱（Pillar2）として自己資本との比較によってリスクの大きさが評価される。

2 BCBS, “Recalibration of shocks in the interest rate risk in the banking book,” July 2024.

3 BCBS, “Recalibration of shocks for interest rate risk,” Consultative Document, December 2023. 市中協議文書に関しては、小立敬「銀行勘定の金利リスク（IRRBB）に関するバーゼル委員会の提案―金利ショックに関連する見直し―」『野村資本市場クォータリー』2024 年冬号を参照。

4 BCBS, “Interest rate risk in the banking book,” Standard, April 2016 (SRP31 and SRP98). IRRBB 基準の概要については、小立敬「第 2 の柱で決着したバーゼル委員会による銀行勘定の金利リスク（IRRBB）の取扱い」『野村資本市場クォータリー』2016 年夏号（ウェブサイト版）を参照。

5 BCBS, “Basel Committee work programme and strategic priorities for 2023/24.”

市中協議文書は、時系列データを 2022 年末まで拡張して金利ショックの水準を再調整することに加え、金利ショックを決定するための計測手法を改定することを提案していた。今般の最終文書は、市中協議文書が提案した計測手法の改定をそのまま採用しているが、パブリック・コメントを踏まえて市中協議文書から以下の点を修正している。

- 直近の金利動向を適切に反映させるため、時系列データを 2022 年末から 2023 年末に延長
- 市中協議文書は現行と同様、金利ショックの数値を 50 ベーシスポイント（bp）の単位で丸めていたが、クリフ効果と潜在的な歪みを削減し、中央銀行の政策金利の調整幅との整合性を確保する観点から、25bp 単位で丸めるように変更

これらの修正によって各通貨の金利ショックの大きさは市中協議文書が提案したものとは一部で異なっている。なお、円金利の金利ショックに関しては現行から変更はない。

Ⅱ 最終化された各通貨の金利ショック

最終文書が定める各通貨に関する金利ショックは、図表 2 のとおりである。なお、市中協議文書が提案していた金利ショックは、図表 3 の通りである。

図表 2　最終化された金利ショック（単位：bp）

	アルゼンチン・ペソ	オーストラリア・ドル	ブラジル・レアル	カナダ・ドル	スイス・フラン	中国人民元	ユーロ	英ポンド	香港ドル	インド・ルピー	インドネシア・ルピア
パラレル	400	350	400	200	175	225	225	275	225	400	325
短期	500	425	500	275	250	300	350	425	375	500	475
長期	300	300	300	175	200	150	200	250	200	300	225

	日本円	韓国ウォン	メキシコ・ペソ	ロシア・ルーブル	サウジ・リヤル	スウェーデン・クローナ	シンガポール・ドル	トルコ・リラ	米ドル	南アフリカ・ランド
パラレル	100	225	400	400	275	275	175	400	200	325
短期	100	350	500	500	375	425	250	500	300	500
長期	100	225	200	300	250	200	225	300	225	300

（注）　網掛けは、現行水準から改定される箇所を示す。
（出所）最終文書より野村資本市場研究所作成

図表 3　市中協議文書で提案された金利ショック（単位：bp）

	アルゼンチン・ペソ	オーストラリア・ドル	ブラジル・レアル	カナダ・ドル	スイス・フラン	中国人民元	ユーロ	英ポンド	香港ドル	インド・ルピー	インドネシア・ルピア
パラレル	400	350	400	200	150	300	250	300	200	400	350
短期	500	450	500	250	250	300	350	400	350	500	450
長期	300	300	300	200	200	300	200	250	200	300	250

	日本円	韓国ウォン	メキシコ・ペソ	ロシア・ルーブル	サウジ・リヤル	スウェーデン・クローナ	シンガポール・ドル	トルコ・リラ	米ドル	南アフリカ・ランド
パラレル	100	250	400	400	300	300	150	400	200	350
短期	100	350	500	500	350	400	250	500	300	500
長期	100	250	200	300	250	200	200	300	250	300

（注）　網掛けは、最終化された水準と異なる箇所を示す。
（出所）市中協議文書より野村資本市場研究所作成

Ⅲ IRRBB に関する今後の留意点

バーゼル委員会の最終文書は、2026 年 1 月 1 日から改定された IRRBB 基準を適用すると定めている。日本では、バーゼルⅢの IRRBB は、第 3 の柱に関する告示（開示告示）[6]と監督指針に定められている[7]。このうち金利ショック・シナリオの計測は、開示告示において規定されている[8]。改定された IRRBB 基準に従って各通貨の金利ショックの大きさの改定を行うべく、金融庁から開示告示の改正案がいずれ示されることになるだろう。

金利ショックの改定に伴って、米ドルやユーロ、英ポンド、スイスフランを含む一部の通貨では水準が引き上げられることから、計測される当該通貨の IRRBB の水準（ΔEVE および ΔNII）に影響が生じることが考えられる。もっとも、円金利についてはパラレル 100bp、短期 100bp、長期 100bp といずれもフロアに張り付いており、現行からの変更はないため、日本の金融機関が計測する IRRBB の通貨合計値には、大きな影響は生じないものとみられる。円金利の金利ショックに関しては、日本銀行の金融政策が正常化を経て利上げ局面に入った後、次回のバーゼル委員会による定期的なレビューにおいてその水準が変更されるかどうかであろう。

他方、2023 年 3 月のシリコンバレー・バンク（SVB）に始まる米地銀の連鎖的な破綻と経営不安定化の背景の 1 つとして、金利リスクの管理の失敗が指摘されている。例えば、2023 年 3 月の銀行危機に関してバーゼル委員会が 2023 年 10 月に公表した報告書は、米国では IRRBB が未導入であったために、バーゼル基準の IRRBB が適用されていれば実効的な監督措置が可能になり、十分に金利リスクを緩和できたと指摘する[9]。

もっとも、報告書は、現行の IRRBB 基準に関して金利リスクの削減には不十分であるとの見解も示している。すなわち、IRRBB において、特にヘッジの有無や契約上の満期、モデルの仮定を含むより詳細な報告を求める必要があるとし、また、IRRBB の計測結果に対して銀行全体に追加的な資本賦課を適用する法域がある一方で、そのような枠組みがない法域もあり、法域間で IRRBB の扱いが区々であることが指摘されている。

バーゼル委員会としては、2023 年 3 月の銀行危機に関する報告書を踏まえて、今後、フォローアップの分析作業を行った上で、政策オプションを講じる必要があるかについて検討する方針を明らかにしている。バーゼル委員会によるそれらの作業を通じて、現行の IRRBB の枠組みの見直しを行うことになるのかどうかについても注視していく必要があるだろう。

---

6 銀行法施行規則第十九条の二第一項第五号ニ等の規定に基づき、自己資本の充実の状況等について金融庁長官が別に定める事項（平成二十六年金融庁告示第七号）。

7 日本における IRRBB の適用に関しては、小立敬「金融機関の自主性が尊重される銀行勘定の金利リスク（IRRBB）の国内適用方針」『野村資本市場クォータリー』2017 年夏号（ウェブサイト版）を参照。

8 開示告示のフォーマット「IRRBB1：金利リスク」において、パラレルシフト、短期金利、長期金利に関する「金利変動幅」として規定されている。

9 BCBS, “Report on the 2023 banking turmoil,” October 2023. 当該報告書に関しては、小立敬「2023 年の銀行混乱に係るバーゼル委員会・FSB 報告書―銀行監督・規制、破綻処理の枠組みの新たな課題―」『野村資本市場クォータリー』2024 年冬号を参照。